

徳島県文化財調査概報

昭和 55 年度
(1980)

徳島県教育委員会

序

本調査概報は、徳島県教育委員会が昭和55年度に実施した埋蔵文化財調査概報であります。しかし、昭和55年度には、県道「鳴門池田線」改良工事や国道193号改良工事等に伴う調査も実施されましたが、いずれも昭和56年度に継続されているため、これらの調査概要については、次年度に刊行することとし、本書には、調査の完了した「大毛島39区遺跡(仮称)」の発掘調査の概要のみを記録することにしました。

なお、本調査に当って、多大の御協力と御援助を賜った関係機関、各位並びに地元住民の方々に対し、あつくお礼を申しあげる次第であります。

昭和57年3月

徳島県教育委員会

教育長 藤野井 親 仁

「大鳴門橋」架橋関連工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

大毛島39区遺跡（仮称）

例 言

- 1 本書は大鳴門架橋に関連した国道28号線改良工事に伴う発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所の要請をうけて徳島県教育委員会文化課が実施した。
- 3 本書に収録した大毛島39区遺跡は、昭和55年4月8日から昭和56年3月31日まで行った。
- 4 収集した資料の実測は、遺構は調査員が分担し、遺物は松永・多田、撮影は立花・松永が行った。
- 5 本書で用いた絶対高は標高をあらわし、方位はすべて磁北である。
- 6 今回の一連の調査において、徳島県文化財保護審議会伏山委委員(鳴門市史編纂室)、徳島市教育委員会一山典氏、香川県教育委員会大山真充氏からは御指導と御教示を受け、また菅原康夫、小笠原賢、井上章生(県教育委員会文化課)の各氏には調査を通して協力を得た。また飲料水及び駐車場については、鳴門東小学校にお世話になり誌上をもってお礼を申し上げる次第である。
- 7 調査は以下の組織で行った。

調査主体 徳島県教育委員会文化課

調査総括 立花博(文化課文化財保護班長)

調査担当 松永佳美(文化課社会教育主事)、島巡賢二(文化課主事)

調査員 多田寿一(文化課文化財調査員)、菊谷富男、喜井肇平(文化課文化財調査員・当時)

作業員 市川栄二、岡本増吉、川口重治、藤田美一、益岡秀樹、山田地、和田茂、新聞玉枝、大頭君江、谷恵美子、中長米子、橋本真知子、林勝子、藤田恵美子、藤田恵、益井タカ子、松田朝子、南谷詳子

大毛島39区遺跡(仮称)目次

〈本文〉

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経過	2
III	基本層序	5
	A調査区	5
	B調査区	6
	C調査区	6
	D調査区	7
IV	遺構	7
	水田址	7
	集石遺構	8
	土壇状遺構	9
V	遺物	10
VI	まとめ	12

〈挿図〉

第1図	大毛島39区遺跡周辺の主要遺跡	17
第2図	大毛島39区遺跡全測及び遺構配置図	18
第3図	A調査区土層図	19
第4図	B・C・D調査区土層図	20
第5図	B調査区水田址遺構図	21
第6図	B調査区集石遺構図	22
第7図	B調査区集石遺構内土器出土状況図	23
第8図	B調査区土壇状遺構図	24
第9図	石鏃, サヌカイト・チャート剥片図	25

第10図	土錘実測図	26
第11図	土師器，土錘，支脚実測図	27
第12図	土師器拓本図	28
第13図	須恵器実測図	29
第14図	磁器実測図	30
第15図	陶器実測図	31

〈図 版〉

調査区全景，D調査区全景	33
調査風景	35
A調査区確認状況	37
A調査区水田址検出状況	39
B調査区水田址検出状況	41～45
B調査区水田址検出状況及びB調査区水田址足跡	47
集石遺構の検出とその状況	49～57
集石遺構の基底部	59～61
S K-01，S K-02検出状況	63
S K-02，S K-03検出状況	65
A調査区出土状況及び土層	67
出土遺物	69～75

I 遺跡の位置と環境

大毛島39区遺跡（仮称）は、鳴門市鳴門町土佐泊浦大字野字大谷27、28、29、38、49の2、50の3番地の大毛島内に位置する。本遺跡は、大毛島をほぼ南北に連なる山系が野地区で大きく入りこんでいる。東に延びる小支脈の間にはさまれた標高4～6mの微高地にある。

この微高地の形成は、山系間的小溪谷による堆積作用と海岸の侵蝕作用によるものと思われる。等高線を見ると、旧海岸線はこの調査区付近では大きく入りこんでおり、複雑な海岸線を形成していたとみえて、調査区のすぐ北側の岩に海蝕痕がみられることからそれがうかがえる。地目は現在水田及び畑地となっている。

この大毛島の地質は、阿讃山脈上にある中央構造線の北側に沿って形成されている上部白亜系和泉層群であり、本島中央部に南北に泥岩層が細く走り、その左右を砂岩層で構成している。崖面の切断面を見ると、北東から南西に向って斜めに走行している。

本遺跡から周囲を展望すると、東は紀伊水道を望み、北は鳴門海峡を経て淡路島から備讃瀬戸が望める。

大毛島地区における遺跡の状況は、現在のところ弥生時代を上限として今日に至っている。弥生時代の遺跡としては、鳴門公園千疊敷下遺跡において弥生中期の土器片、有蓋石罌2点（秋山・1976）が採集されている。他に鳴門周辺の海より石剣が網にて採集されたことが記録にあるが現物が無い為詳細は不明である。

古墳時代では、現在の亀浦フェリー乗場のすぐ南側の丘陵上にある納言山に計7基の組合式箱式石棺を伴った円墳が存在していたと記録にあるが現在では1基のみが現存している。納言山古墳群と小さな入江をささんで向かい合うように北山古墳群、大毛島南端の土佐泊港東の尾根上に土佐泊浦松浦古墳群があり、いずれも組合式石棺と記録されているが現在は不明である。

以上が大毛島地区における遺跡の分布状況であり正確な調査記録もなく、まだ十分に把握できていないのが現状である。

他の鳴門海峡附近の遺跡としては、島田島に室古墳群2基、田ノ浦古墳群3基、阿波井神社古墳群3基、島向古墳などが記録されている。なお昨年12月の文化課埋蔵文化財担当者の現地研修の折に室遺港のすぐ裏の平地から多量の須恵器、土器が散布していることが確認された。高島に於いては竹島古墳群6基が記録されている。

歴史時代に入ると、土佐国（高知県）と大阪を結ぶ交通路の要所（港）として栄え色々な文獻からうかがえる。平安時代前期には、土佐泊港入口の松瀬山山頂に土佐泊庵寺（仮称）が存在したとみられ、軒丸瓦、唐草文軒平瓦が出土している。

以上極めて簡単に述べてみたが、国道28号線改良工事に伴う調査としては、本遺跡の調査で39ヶ所のうち8ヶ所目であり、今後の調査例により資料は数多く増えていくものと思われる。

※昭和56年度調査の第22区遺跡（仮称ウチノ海遺跡）に於て、弥生時代の太型蛤刃磨製石斧2個体分、石罌3点、古墳時代と思われる集石遺構（製塩址）が検出されたことを付記しておく。

II 調査の経過

国道28号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査は、昭和52年4月28日～5月20日にかけて行い、本州四国連絡橋公団（以下本四公団と略）との協議により昭和52年度2区と6区の北半分、昭和53年度5区、6区の南半分、7区、昭和54年度16区の南半分、21区の南半分の調査などが行われてきた。今回報告する39区遺跡は、昭和54年4月8日から昭和56年3月31日までの間に4,500㎡にわたって行ったものである。現行の水田区画を基にA～D調査区の大区域を設定し、各調査の地形の状況に応じて5×5mの地区割を行い小区域とした。この間、旧地主とのトラブル、台風の接近、降雨及び湧水の排水に伴い、調査に支障をきたし、必ずしも順調に調査は進まなかった。以下、調査日誌の概略を記する。

調査日誌抄

- 4月8日 本四公団鳴門工事事務所へあいさつ、現地を確認。
- 4月15日 資材倉庫より測量器材の運搬、調査区傍にBMを設置、調査区内フィールドを行う。項患部、土師器片採集、何らかの遺跡の存在が十分予想された。
- 4月16日 地形測量開始。
- 4月22日 地形測量黄砂の為、非常に見通しが悪く作業困難を極めた。
- 4月24日 調査前全景写真を撮る。
- 4月30日 プレハブ建設（現場事務所）予定地の打ち合わせを現地で行う。
- 5月1日 プレハブ建設。
- 5月2日 調査に伴う資材運搬。
- 5月6日 本日より作業員が出動。プレハブ内の整理、調査区周辺の草刈り。
- 5月8日 午後マムシ出現し捕獲する。調査区内全域にマムシよけのブラックリーフを散布。
- 5月10日 B調査区センター杭打ちを行う。
- 5月12日 小区域の杭打ち、各区をA～Z、1～10との組み合わせにより設定。
- 5月13日 B調査区の全面積の $\frac{1}{4}$ をグリッド発掘を行う予定として1グリッドを地表下45cmまで発掘第4層より青磁片が出土。
- 5月19日 B-2区の第4層より江戸時代と見られる足跡と小溝が確認され、水田址と想定。
- 5月20日 B-2区水田址の確認状況写真撮影。
- 5月23日 B-2区平面図及び断面図完了。B-2区、B-4区、C-3区、調査区内作物の収穫完了まで調査中断の為シートを入れ埋め戻し。
- 5月27日 D-2区、E-1区で水田址の検出。
- 5月28日 F-2区内礫、重円礫の集石を確認。
- 6月5日 F-6区においてグリッド西隅で土塊状遺構を確認、検出。遺物を伴っていない為、性格時期は本日のところ不明。
- 6月12日 F-2区、H-3区、H-5区、G-4区で2回にわたっての整地面がみられ、何らかの人工的な手を加えられた整地面であることが判明。

- 6月13日 F-2区集石内清掃, 写真撮影, 平面図の準備。調査員, 作業員の車を置く場所に問題が起き, 松永駐車場探しに苦勞。
- 6月14日 F-2区平面図に取りかかる。H-5区清掃, 写真撮影。
- 6月19日 A調査区草刈り開始, 草刈り中にマムシ出現, 捕獲する。調査区内これで二匹目。
- 6月23日 A区小区域設定, 杭打ち, A区表土はぎ。
- 6月24日 本四公団より職員來訪, 話し合いで全面発掘となる見通しを伝える。
- 6月27日 旧地主と本四公団とのトラブルにより明日より問題が解決するまで作業は中止となる。
- 6月30日 本日より作業再開。
- 7月3日 全面発掘に伴う契約変更について本四公団と話し合いを行う。
- 7月7日 C調査区草刈り。
- 7月12日 5日間の雨の為, A及びB調査区の排水を人力とポンプで行う。A調査区でまたもマムシ出現, 捕獲する。これで三匹目, 作業員の足元で見つかり, よくかまらなかったものだと一同大さわざ。
- 7月14日 ほぼ1週間ぶりに掘る作業に入った。遅れをどう取り戻すか, 調査計画の効果的な方法はいかにすべきかを話し合う。
- 7月28日 C調査区センター杭打ち。
- 7月29日 雨の為, 道具の補修, 出土遺物の小区域ごとの選別と洗浄。
- 7月30日 C調査区小区域設定, A調査区B-1区の状況からみてA調査区も何らかの遺構があることが判明。本四公団へ契約変更書類提出。
- 8月5日 A調査区B-1区, D-1区, H-3区, J-3区, H-1区清掃, 写真撮影。
- 8月6日 A調査区J-1区第4層より石鏃出土。
- 8月13日 本日より17日まで作業員盆休み。
- 8月18日 本日より作業員による作業再開。B調査区の各小区域の土層写真撮影及び土層図を取る。
- 8月28日 第16調査区よりベルコン2台運搬。
- 8月29日 午後中間報告の為の清書, 印刷, 製本を行う。
- 9月2日 A調査区において調査区をほぼ斜めに大きく落ちこみ遺構を確認する。
- 9月4日 A調査区落ちこみ模式図作製。
- 9月5日 本四公団へ中間報告を提出。
- 9月10日 台風13号接近によりプレハブまでの道路は40cmぐらいまで水につかりその中をカメラ, 測量用具を撤収。
- 9月12日 A調査区, B調査区の排水作業を行う。
- 9月16日 A調査区の溝状落ちこみ発掘完了。現段階では江戸時代の水田址と考えられる。
- 9月17日 本四公団と来年度の調査について打ち合わせ。
- 9月19日 A調査区写真撮影。
- 9月22日 A調査区平面図完了。B調査区発掘調査再開。
- 9月26日 B調査区盛土排除完了。
- 10月2日 B調査区で水田址の足跡, 溝が確認され始めるが足跡の確認できる層と覆土とがはっきり

しないので困難を極める。

- 10月8日 B調査区の水田址西の方になると水田址が切れてなくなり、他の整地面がみられる。
- 10月11日 B調査区足跡確認状況写真撮影。
- 10月16日 B調査区F-2区を中心とした集石遺構はいくつかのブロックに意図的に集中しており、集石の状態、石が焼けていることから製塩に伴う遺構ではないかと調査団では想定。
- 10月17日 集石内より炭化物を含み、石に黒く炭化したもの（黒斑）がこびりついており製塩址との想定を裏付ける資料が増加。
- 10月23日 本日より水田遺構、集石遺構の検出に入る。
- 11月4日 B調査区水田址遺跡のコピーを石膏にて取る。A調査区のトレンチにより地表下150～180cmで海岸に伴うと思われる自然石が出土。縄文海進期に相当するものと想定。
- 11月5日 C調査区の小区域を平板測量。
- 11月6日 B調査区西半分水田址平面図実測作業に入る。
- 11月14日 B調査区西半分水田址平面図完了。エレベーションに入る。午後鳴門東小4～6年児童全員見学。驚きをもって熱心に見学。ユニークな質問に調査員一同解答に汗だくで応対する。
- 11月15日 A調査区土層セクション図開始。
- 11月17日 B調査区集石遺構写真撮影。C調査区第一層の発掘に取りかかる。
- 11月18日 鳴門中学生徒全員が見学。
- 11月22日 午後、現地中間報告会を行い約70名余りの人が参加。
- 12月4日 B区水田址全域調査完了。
- 12月5日 A調査区土層セクション図、平板図完了。午後、県教委派遣社会教育主事見学。
- 12月9日 C調査区江戸時代の水田址を確認。
- 12月13日 C調査区、D調査区レベル杭打ち、C調査区B M 4 m 30cm、D調査区B M 4 m、D調査区第一層拂土開始。
- 12月16日 香川県教育委員会大山真充氏来訪、製塩址について御指導をいただく。
- 12月18日 C調査区水田址検出完了。
- 12月25日 現地御用納め。
- 1月6日 仕事始め、B調査区、C調査区写真撮影。
- 1月7日 C調査区水田址平面図作製開始。
- 1月19日 徳島市調査団一同来訪。
- 1月23日 C調査区平面図完了。D調査区平面図作製開始。C調査区、D調査区写真撮影。
- 1月24日 D調査区平面図完了。断面図作製中。
- 1月26日 A調査区埋め戻し開始。
- 1月27日 C調査区土層図作製開始。
- 1月28日 C調査区土層図完了。
- 1月29日 B調査区集石遺構平面図完了。エレベーション開始。
- 2月6日 B調査区集石遺構根石平面図開始。
- 2月16日 B調査区集石遺構エレベーション完了。

- 2月24日 A調査区埋め戻し完了。
- 2月25日 B調査区西側土層セクション作図。C調査区埋め戻し開始。
- 3月3日 B調査区集石遺構根石平面図完了。
- 3月5日 B調査区集石遺構根石写真撮影。
- 3月12日 B調査区SK-01～SK-03、確認及び検出、平面図、土層図を取る。
- 3月13日 B調査区SK-01～SK-03検出完了。土層図、平面図完了。写真撮影、B調査区埋め戻し開始。
- 3月16日 C調査区埋め戻し完了。
- 3月19日 D調査区ブルドーザによる埋め戻し開始。
- 3月28日 B調査区埋め戻し完了。
- 3月30日 発掘器材洗浄及び貝数確認。
- 3月31日 トラックで資材運搬、発掘完了。

III 基本層序

A調査区

第1層は暗灰黄色砂質土層の耕作土であり、水田耕作が最近までなされていたようである。須恵器、土師器、近世磁器、陶器片及び現代遺物を含んでおり、土地利用の激しさがうかがえる。

第2層は黄褐色砂質粘土層で、いわゆる水田床土（ハグネ土）であり、水田床面の水漏れを防ぐために叩き固めた土である。土師器、染付磁器、陶器などを含んでいるのが第1層に比べて絶して少ない。

第3層はふい黄褐色粘質土層で少量の炭化物の粒子を含んでいる。旧水田址の耕作土である。土師器、染付磁器などを含んでいる。旧水田址の時期は江戸時代後期と思われる。

第4層は黄褐色粘質土層で旧水田址の床土である。第3層と同様の遺物が出土している。なお第2層と同じ土質であることから、現在の水田と同様の土を床土として搬入し使用したことからうかがえる。

第5層は明黄褐色砂質土層で和泉砂岩質の重礫を含んでいる。現在の水田址に拡張する為に用いられた埋土である。埋土は小溪谷のすぐ上の方から運びこんだようである。土師器、須恵器などが出土している。

第6層は第3層と同じふい黄褐色粘質土層であり、段々になった田の下段の旧水田耕作土層である。土師器、染付磁器などが出土している。

第7層は褐色粘質土層であり、下段の旧水田床土である。土師器、染付磁器などが出土している。

第8層は黄褐色粘質混土礫層であり、この山系における堆積作用土と考えられ、海の方に向かって傾斜している。磨滅した土師器片がみられるが取り上げる際には粉々にくだける状態であった。

第9層は暗褐色粘質土層でグライがかった層であり、や、砂質で炭化物を含んでいるが無遺物層である。なおこの層より湧水があり調査は困難を極めてきた。

第10層は緑灰色砂質粘土層のいわゆるグライ層であり、グライ下面は人頭大からこぶしぐらいの円礫があり、海蝕痕と合わせて考えてみるならば旧海岸線であることをうかがわせる。（図版にはない）

以上10層について述べたが、10層以下は湧水と壁面崩落の恐れが出てきた為、これ以上掘り下げることを断念した。

B調査区

第1層はA調査区と同じく、暗灰黄色砂質土層で現水田耕作土である。土師器、須恵器、チャート剥片、陶器、染付磁器等が出土しており、相当長期間にわたる遺物を含んでいる。

第2層もA調査区と同じく、黄褐色粘質土層（灰オリーブ砂質土層を少量含む）で、いわゆる水田床土（ハガネ土）であり、現在の水田床面と思われる。

第3層は場所によって分かれており、南半分は灰オリーブ砂質土層（図版第3層）であり、後ほど述べる江戸時代の水田址覆土土層である。この土層を切りこんだ形で足跡、溝跡等の遺構が確認された。北半分はにぶい浅黄色砂質粘土層（図版第15層）で土師器、須恵器、陶器、磁器片を伴っており、現水田面にする際に平坦に削平された面であると考えられる。遺物からみて近世において堆積された土層と思われる。

第4層はにぶい黄褐色粘土層であり、水田址覆土の下半分で溝等の深い耕作の際に切りこみがみられる。

第5層の南半分は明黄褐色砂質土層で（図版第5層）、水田址の床土である。東半分は浅黄色砂質粘土層（図版第15層）で、この層を切りこんだ形で集石遺構が形成されており、集石遺構覆土である。土師器、須恵器等が出土している。

第6・7・8層はいずれもマンガン層を含んだ層である。第6層は明褐色粘質土層、第7層はにぶい黄褐色粘質土層、第8層は灰黄褐色粘質土層である。いずれも少量の土師器片を含んでいた。

第9層より第12層にかけては、黒褐色粘質土層と黄褐色粘質土層がサンドイッチ状に堆積されておりしかもやや黒みがかるとか砂質がかかるといったごく微細な変化がみられ、いずれも小渓谷の沖積作用による。これらの土層はいずれも小渓谷の沖積作用によるものと思われ、土器片の磨滅したものが少量出土している。

第13層、第14層は黒褐色、あるいは黒色砂質土層で、ややグライがかかった層であり旧海岸線の堆積土層と思われ、湧水がみられた。

C調査区

第1層は暗灰黄色砂質粘土層でいわゆる現水田耕作土であり、土師器、磁器、陶器片などが検出された。

第2層は明褐色粘質土層であり、現水田の床土である。第1層と同じ遺物が出土しているが第1層に比べて総じて少ない。

第3層はにぶい暗色砂質土層、第4層は灰黄色砂質粘土層（図版第10層）でいずれも水田址の覆土であり、染付磁器、陶器が出土していることからA調査区、B調査区の水田址と同じく江戸時代後期と思われる。

第5層はにぶい灰黄褐色粘質砂層（図版第15層）で、第3層と同じ土色であるが粘質がかっている旧水田址床土である。遺物は染付磁器が出土しているが極めて少量である。

第6層の黒褐色粘質土層（図版第4層）及び第7層のオリーブ暗色砂質土層（図版第7層）であり、

いずれもマンガンを含んでいる。遺物は全然見あたらなかった。この二つの土層は小渓谷の沖積作用による堆積と考えられる。

第8層は褐色砂質土層（図版第8層）でありややグライがかった層である。A調査区及びB調査区と同様に旧海岸線に伴う土層と思われる。

D調査区

第1層は暗灰黄色砂質粘土層であり、現水田耕作土である。遺物はA調査区、C調査区と同様である。

第2層は明褐色粘質土層であり、現水田の床土である。遺物は第1層と同様であるが第1層より総じて少ない。

第3層は明黄褐色砂質粘土層（図版第8層）であり、旧水田址覆土である。遺物はA調査区、B調査区、C調査区の旧水田址覆土と同様に染付磁器、陶器が出土しており、江戸時代後期と思われる。

第4層の明褐色粘質土層（図版第10層）は旧水田址床土である。遺物は第3層と同様であるが、やはり総じて少ない。

第5層の灰黄褐色砂質粘土層（図版第3層）から第6層の黄褐色粘質土層は、やはり小渓谷の沖積作用による堆積と思われる。

第7層は灰褐色砂質土層であり、ややグライがかった層であることからA調査区、B調査区、C調査区の最下層と同様に旧海岸線に伴う層でありここでも湧水がみられた。

IV 遺 構

水田址以外はすべてB調査区に集中している為調査区別に分けて遺構ごとに述べることにする。

1 水 田 址

A・B・C・D各調査区全域にわたってみられた遺構であり、現水田の床土直下で検出された。染付磁器からみていずれも江戸時代後期の水田と思われる。

A調査区の水田址は、段々田（比高差40～70cm）になっていた下段の4枚以上の水田を上段の床土より下の土壌を削平して下段の水田を埋土し、現状のA調査区の範囲の水田に耕地整理したものと思われる。埋土は明黄褐色砂質土層であり、和泉砂岩質の頑硬な重礫を大量に含んでいた。その埋土内に染付磁器、須恵器、陶器、石礫等が混入していた。

B調査区の水田址は、調査区の南西部で検出された。南限は下段の現水田によって削平され、西限は現場事務所のプレハブ下となり、更に西側の現ため池によって調査が不可能であった為不明である。北限は南西に一段高い面がみられ一応ラインはつかめた。東限は接する集石遺構を削平する形で大畦畔を検出し判明した。水田址内からは、第3層の灰オリープ砂質土層が足跡、溝等の覆土であり、第4層の黄褐色粘土層を貫入した状態で検出されたが異常冷夏による降雨日数が多く確認に困難を極めた。

畦畔跡は水田址東限にあり北端で幅50cm、南端で1m、高さ10cm程であり断面の中央部は平坦であり端の方はなだらかに傾斜している。土壌は粘質土層を踏み固めた状態で作られたとみえて同レベル

の土壌と比べて非常に堅かった。一番東限は後述の集石遺構を削平したものとみられ畦畔下に集石は全然みられなかった。

溝跡は、水田内ほぼ全域にわたって幅5～10cm、深さ5～20cm、長さは一番長いもので18m、短いもので1mの計33条が検出された。断面がV字状あるいは逆台形状を呈しており、畦畔跡とはほぼ直行して溝跡が平行して走っている。断面からみると、人力によって行われたものでなく牛か馬による痕跡と考えられる。

当初は取壊時における排水用の溝と思われたが、この地区は現在でも水田の水の確保に苦勞をしており、しかも溝はほぼ水平を保っていることから、牛か馬による荒起しの際の痕跡と断定した。

足跡は水田内ほぼ全域にわたってみられ、長さ20cmから30cmのものが総数1,474ヶ所検出された。この総数は再々の降雨によって消滅したものを除いているので検出された最低数であり、それ以上存在したことは確実である。足跡をよく観察してみると、左右の区別、走行方向、踵、指先などが判別できるものが相当見られる。足跡の大きさからみて大人のものとは考えられない程小さいものがあることから耕作のある時期には子供も含めた家族全員が携わっていたことがうかがえる。走行方向は一定の方向に限定されずあらゆる方向のものが検出された。なお円形あるいは楕円形に近いものについては、溝跡と関連して考えてみれば、牛あるいは馬の足跡の可能性も考えられる。なお水口、小畦畔については何度かの精査を行ったが検出できなかった。したがって現段階では小畦畔はなく、水口は調査区外の他にあったと考えられる。

C調査区水田址は、A調査区の水田址と同じく2枚の水田址であったものを現水田の広さに直したものであり、上段水田址と下段の水田址との比高差は約15cm程である。水田の広さを現在の広さに変える際はA調査区と同じく上段の水田の耕土を除いておき、上段の土壌を削平して下段の水田を埋めて整地したものである。埋土より染付磁器、陶器、土師器、須恵器片等が出土している。時期については染付磁器、陶器片などからみて江戸時代後半と思われる。

D調査区水田址もやはりA調査区、C調査区と同様に2枚の水田を現水田面の広さに直したものであり、上段水田址と下段水田址の比高差は約8cm程である。整地方法及び時期についてはA調査区、C調査区の水田址と同様である。

2 集石遺構

B調査区南東部において、第5層の浅黄色砂質粘土層、一部は現在の耕作土の攪乱により、第2層の黄褐色粘質土層（床土）の直下層に径1cm～40cmの円礫、垂円礫をもってブロック状に集石した遺構が検出された。集石のブロックは、長さ1m×1.3mのものから、3m×1mのものまで約20ヶ所重複して検出された。集石ブロックは整然と並んだものでなく、重なり合っており、しかも長軸方向もまちまちである。集石ブロックは今後の詳細な検討により更に増加する可能性は十分考えられる。集石ブロックの形状は10cmから40cmの円礫を中に向けてやや傾斜させて、中にやや小さい石を集石したもの、同程度の扁平の石をやや内傾させて集石したもの、小さな円礫を割に密に集石したものなどがある。大きな円礫を用いて集石したものは1段もしくは2段で構成され、比較的高さをもたない。小さな石を集石したものは、数段の石を積み重ねており比較的高さをもっているようである。集石プランは明確ではないが円形、楕円形、長方形とみられるが確定はできない。なお重複しているところ

ろからみて集石が一時期に一度に形成されたものではなく数次にわたって集石され、現状の集石状況となっているのである。北側はこの状況が北限であり、東はC区の水田が形成される折か、あるいはそれ以前にすでに削平されており、南側はこの集石状況で南限である。西側は水田趾の畦畔によって削平されている。したがって東西にはやや広がって存在した可能性は考えられるが、南北はこの範囲で形成されていたと思われる。

この集石遺構の石は、和泉砂岩製の円礫を用いている。石の中には火を受けたと思われる全体の1～2割が赤く焼けていた。表面は赤くなくても調査の際に傷ついた石の内部は赤褐色になっており、殆どの石が火によって変色しているのである。また石の表面には黒斑がみられ、科学的検査を行っていないので確証はできないがカルシウムの付着でないかと思われる。集石の間の土は灰褐色と赤褐色が入り混じり乾燥している折は非常に堅くさらさらしており、水分を含みやすく湿気をおびやすい為、水気を含むと非常に粘り気のある土である。土の中には細かい粒子の焼土、炭化物が含まれており、このことから火が加えられたと考えられる。集石内の遺物としては、細片化した土師器片、須恵器片が約180片出土している。土師器の中には火の使用によって器面が剥落しているものもみられる。一部には弥生土器片と思われるものもみられる。

以上集石遺構について述べてみた。この集石遺構の性格についてはまとめの項で述べることにする。

3 土壌状遺構

B調査区北東部において3ヶ所検出された。北よりSK-01～03と名付けた。

○SK-01

F-6及びE-6区にかけて検出されたもので、集石遺構と同じく第5層のマンガン大粒を多量に含む浅黄色砂質土層（図版第15層）を切りこんだ形で確認された。長軸N37°Eでたて2.14m、よこ北方で1.2m、南で1.86m、深さ0.7mの隅丸長方形プランを呈し、西側部分がやや出っばった形となっている。断面は北側がややなだらかに落ち、底は平坦を示し、南側で急に立ち上っている。土層を観察すると風状に大きく落ちこんでおり、その後徐々に堆積したと思われるが土層では明確な差はみられなかった。なお、土壌の南側に自然石が1個置かれた形で出土している。土壌内から遺物は殆どみられず、わずかに磨滅した土器片（弥生土器か土師器）が数片出土したにすぎない。層序からみて集石遺構とはほぼ同時期に存在したと考えられる。

○SK-02

F-4区において検出されたものでSK-01と同じく浅黄色砂質土層（小礫を含む）の最直下層。長軸N52°E、たて2.24m、よこ1.9m、深さ0.2mの隅丸長方形プランを呈する。床はややなだらかに中央に向けて傾斜しており、断面は風状をなしている。覆土より細粒の炭化物、火を受けて焼けた小亜円礫、磨滅した土器片が数片出土している。層序、覆土の状況からみてSK-01と同じく集石遺構とはほぼ同時期と思われる。

○SK-03

F-4、G-4グリッドにかけて検出されたもので、SK-01、SK-02と同じく小礫を含む浅黄色砂質土層の最直下層で確認された。南半分は土層観察用中央セクションベルトの中に入りこんでいる。長軸N138°Eで長さ現在2.42m、よこセクションベルト付近で1.96m、北で1.5m、深さ0.2mで

隅丸長方台形を呈し、やや南になる程深い皿状をなしている。覆土中より細粒の炭化物、焼土、焼けた小皿円礫、磨滅した土器が出土している。層序、覆土の状態からみてSK-01、SK-02と同じく集石遺構と同時期と思われる。

V 遺 物

この39区は調査の都合上A～Dの各区に分けているが、現耕作土の表面観察において39区をも含む当地（野地区）一帯には、土師器、須恵器、その他中近世～現代に亘る陶磁器片が相当量散在する事が確認できる。

「島」という土地の制約上、その利用は緩慢ならぬものがあり、遺物はその殆どが細片となっており現在もさかんに行われている「客土」は、遺物の「現住所」を混乱させている。

本遺跡39区の遺物は、確認しえた限りでは全て弥生時代以降のものであり、弥生時代の遺物としてはその遺構に伴わない埋土とか第1層耕作土から出土した石鏃が8点あるのみであり土器はない。

今回この発掘の中心は、B区の水田址と集石であり、各遺構の最終グメ押しトレンチより確認しえた砂層と水の浸出状況より、古い遺構の存在は考えられないと思われる。

遺物の大半は中近世のものであり、古墳時代に属するものは多くはない。

土鏃の多い事は漁業生活の歴史の一端を窺わせ、輸入物の青磁片が目立つ事は当時の生活水準の高さを想わせる。

他に火縄銃の弾丸と思われる鉛玉が2個出土しており興味深い。

(1) 石鏃、石材 一第9図一

石器は全て弥生時代のサヌカイト製石鏃であり、8点出土している。凹基無茎式が6点〔3～8〕、凸基無茎式〔1〕、凸基有茎式〔2〕となっている。さらに〔15〕のチャート片が石鏃の可能性が高い。

特に〔2〕の石鏃については、全長4cm、重量5gであり、両面中央に稜をもち自然面を残さない緻密な剝離を行っており鋭い側面を持ち断面は菱型を呈している。基部は若干刃つぶしされており貫徹させる目的に合う。

その他〔9～11〕がサヌカイト剥片であり残り全ての石材は灰色、緑色等のチャートである。このチャート片は全区で相当量見られ、殆どが第1層の耕作土中よりの出土であり、田層以下にはあまり見られないところから中近世、特に近世以後に搬入されたものと考えられ燧石として利用されていた可能性もある。

(2) 土 製 品

① 土 鏃—第10図—

全区で43個体出土している。第10図には管状単孔式のみ40個体掲載した。

感覚的ではあるが大中小の各型式に分類できるとすれば〔34～40〕が大型品、〔32、33〕が中型品に属する。

なお〔37、38〕は陶質であり、他は全て土師質である。

特徴的なものとして〔1、3、26、30〕の表面には使用時において生じたと見られる縄目の跡が刻まれている。

全体としてそれぞれの出土層位が攪乱されている上に遺構として伴出していない資料のため年代的なものは今一つ判断としないが、他の遺物などの出土傾向より、中世を中心としたものであろう。

② 土師器—第11図—

この欄には本遺跡周辺のものも含めて掲載した。

[1]は焙烙と考えられる。「く」の字状の口縁部は若干肥厚しながら外反し、口縁端部をさらに肥厚させて丸く収めている。外面は幅2mm程度の荒いクシ状工具で下から上にやや斜方向になりながらも口唇部直前迄クシ目を施す。頸部から上部は後に不完全にスリ消している。内面はやはりクシ状工具で横方向に、頸部を境にし方向を変化させながら全面に亘るクシ目を施す。胎土は少量の金雲母と石英粒、その他白っぽい小粒子を多く含む焼成は良好であり、外面は煤らしきもので頸部以下は黒変している。

[2]は甕であるが、器厚が1mm前後と非常に薄く、「く」の字状の口縁は水平に近く外反し、口縁端部を上方に若干拡張させており、焼成は良好で硬質な感じをもつ。内外面共磨滅で調整状況は不明であるが、内面頸部直下に指頭圧痕が残る。胎土は3mm程度の石英粒を少量含む、外面は明るい褐色に、内面はやや黒変し茶褐色を呈す。

[3、4]は口縁部の成形や外面のタタキ目などが酷似するが[3]の方が若干頸部直下から外方へ張り出す。器形は甕か鍋であろう。丸く収めた口唇部をもち、外面は指頭による強い横ナデにより凹線風のものを作り出した頸部に、体部は斜方向の平行タタキを施しており、その衝撃面は指頭圧痕のように凹んでいる状況である。内面は口縁端近くに若干の段差が見られるが、粘土接合面か、ケズリによるものか磨滅のため不明である。赤褐色に発色し焼成は良好である。

[5、6]は甕と思われる。外反する口縁の端部は上方に断面三角形に拡張している。胎土は1cm程度の大粒の石英片を若干含む、やや白っぽい肌色に発色しており焼成は良好である。内外面共磨滅のため調整は不明である。

[7、8、9]この3点は特に製塩用の土器として考えられるものである。[7]は体部から口縁迄ゆるやかにカーブしており体部は球形に近い。2mm程度の石英粒を若干含む焼成は良好で茶褐色に発色する。内外面共磨滅のため調整は不明であるが内面頸部直下には指頭圧痕がある。[8、9]は脚台である。かなり小型化しており両方共二次火熱を受けており赤褐色や黒褐色に変色している。外面くびれ部には指頭圧痕がある。集石内出土。

[10]は小皿である。焼成は良好であり硬質なものである。胎土も非常にキメ細かく端正である。内外面が一部黒変して内面には赤色顔料のようなものがまだらに付着している。

[11]は不明なものであるがミニチュア壺の口縁部であろうか。口唇部にヘラ先状工具による沈線が一条めぐる。

[12]は椀か。磨滅のため調整等は不明である。

[13]は椀である。胎土はキメ細かく焼成は良好であり黄色に発色している。硬質であり端正なものである。

[14]甕。胎土に1mm前後の石英粒を多く含む焼成はやや甘く白っぽい発色を呈している。磨滅のため調整は不明。

[15]小皿。胎土に1mm以下の石英小粒を多く含む黄白色に発色し焼成はやや甘い。底部内面の中

尖は粘土紐巻上げによるものか隆起している。

[16]は鉢であろう。集石内より出土し、胎土は砂粒を多く含み焼成は良好であるが、二次火熱を受けており内外面共薄茶色に変色している。外面口唇部付近は黒変している。

[17]は皿か。白っぽい砂粒を多く含んでいる。焼成良好。

[18]は棒状圓孔式土鉢である。集石内から出土している。全区43個体の土鉢のうち、この型式はこれ1個である。白っぽい粒を多く含み焼成は良好である。茶褐色に発色している。

[19]は大型の管状単孔式土鉢の破片である。

[20, 21, 22, 23]は脚である。[21]は集石内出土であるが、土師質か瓦質か見わけがつけにくいものである。[20, 21]はへら削りによる成形が明確である。

③ 須恵器—第13図—

[1]～[12]のうち[1, 2, 5]が集石内より出土している。

遺物は[1]の最古式(図面内で)より[6, 7]の糸切り底のあるものから[12]の中世にかけりそうなものである。全区において須恵器の出土量は多くはないが[1]が特別であり、その他の破片からは平安以降のものと考えられる遺物が多い。亀山焼など須恵器に類似しているものも多くなる。

④ 磁器—第14図—

[16]は近世磁器の伊万里茶碗である。網目文の染付である。

[18]は緑釉陶器の可能性はある。

[1]～[15] [17]は全て青磁であり[7]を除く全てがキメ細かな胎土をした優品である。[7]は馬の文様が陰刻されておりその胎土の砂粒が多いゆえに傷みも激しく頭部の実測が出来なかった。

[1]～[4]は銘文が陰刻されており、龍泉窯系と推定される。

[17]は釉が黄色に近く高台には削り出しのへらの痕が鋭利に残っている。底部近くにクシ目状の沈線が高台を中心として回るように斜方向に施されており、見込みにも少し浅いタッチで見える。同安窯系と推定される。

⑤ 陶器—第15図—

[1]～[5]は擂鉢であり[1, 5]は備前焼と思われる。[4]は酷似するが不明。

[7]は大谷焼で杯。

[8]は備前の網目文壺と考えられる。

[9]は京焼。

[10]は皿であるが出自は不明。

陶器の擂鉢関係、特に備前系は鎌倉～室町にかけてのものである。

VI まとめ

1 水田 址

本県に於ける近世の水田址が検出された例は、奈良時代と考えられる徳島市庄遺跡西警察地区(溝跡と小畦畔遺跡)と江戸時代初頭に比定される鳴門市大麻町池谷中内遺跡(足跡、小畦畔、大畦畔、

溝跡)について3例目である。本県に於ける水田址の検出例が少ないこと、しかも同時期に位置する例がない為、文献資料の対比から述べてみたいと思うのである。

大毛鳥地区は、大毛鳥という地名では記録がなく大永3年(1523年)の室町時代後期に大代勝福寺過去帳に「泊庄」という荘園名がみられる。その後、① 延宝6年(1678)5月13日、板野郡土佐泊浦(以下略)検地帳、田2町2反5畝18歩、高19石4斗2升2合、畠13町1反6畝21歩、高66石2斗4升6合とあり、水田より畑が6倍近くに相当することをあらわしている。次に② 元禄8年(1695)12月18日新開検地帳、畠合6反4畝24歩、高合1石5斗1升4合。③ 宝永5年(1708)11月、新開検地帳、田数8畝15歩、高6斗5升7合、畠3反1畝、高1石6斗1升7合。④ 正徳元年(1711)11月、新開検地帳、畠合8反1畝9歩、高合2石5斗4升。⑤ 享保6年(1721)3月、新開検地帳田8反3畝13歩、高2石5斗2合、畠1町1反5畝3歩、高1石5斗6升9合。⑥ 享保18年(1733)11月新開検地帳、田2反7畝24歩、高1石1斗1升2合、畠5反3畝12歩、高6斗7升8合。⑦ 宝暦4年(1754)3月新開検地帳、畠7反4畝3歩、高合7斗4升5合。⑧ 天明3年(1783)11月新開検地帳、畠数4反5畝24歩、高9斗1升6合の以上8例である。大毛鳥地区での水田可能地域は、大毛鳥の中央部を南北に縦断する山系の東側に開ける微高地であり極めて限定されている。したがって、検地帳に於ける水田は、本遺跡が立地する野地区、一つ山系をへだてた黒山地区の2地域に限定される。現在でもこの2地域以外に水田耕作を行っているところはなく、相当以前からのこの地域が水田可能地域であることを物語っている。なお例外としては内の海地区に1ヶ所水田耕作の行われていたことが確認されているが第二次大戦後の水田であり現在は存在しない。したがって江戸時代の水田ではないことは明らかである。

大毛鳥地区の水田耕作は、山系が非常に低く、しかも深みがない為、常時水の流れる溪谷はなく、小川らしきものもない。したがって雨水やごく少量の湧水をため池にためて利用するしかなかったと思われる。現に、現在の水田も水田の周りをとりまくようにため池が掘りこまれ、水を動力ポンプで汲み入れており、しかも標高3m以下の低い所で水田耕作が行われている。昨年8月の例年より降雨量の多い夏でありながら、本遺跡の小溪谷は、豪雨の後約一週間位は流れているがその後は流水がないといった状態であり、現在でも水田耕作には相当苦勞をしているようである。ましてや現在のように動力ポンプのない江戸時代においては、水田耕作の一番重要な水の確保は想像以上の勞力を要していたと考えられる。

本遺跡の水田址であるが、現在の水田地帯から見ると、比高差2~3m高い所にあり、水の確保には不便なところである。しかも大毛鳥山系の支脈がすぐ南側に大きく出てきており、遺跡のすぐ近くまでせまっており、急傾斜であるので日照時間が短かく水田耕作には条件的にあまり恵まれていないことからみて、水田耕作には不適当な所をあえて水田にしたと考えられる。したがって水田の管理維持に相当苦勞していたと思われる。これらの条件を総合すると、野地区の中でも相当遅れて水田耕作が開始されたと考えのが妥当である。水田址の立地、出土遺物からみて江戸時代後半と想定し、文献と照らし合わせてみると、宝永5年(1708)、享保6年(1721)、享保18年(1733年)のいずれかに該当するものであると考えられる。以上の点からみて、本水田址はこの大毛鳥地区における江戸時代後半の貴重な水田址であったことがうかがえる。

2 集石遺構

この遺構の性格については、まず第一に自然に集石したのではなく、人工的に円形もしくは長方形に意図的に配石されたものであることがあげられる。第二に集石の中に火によって焼けている石があること。第三に集石内の覆土は焼土や細かい粒子の炭化物を含んでいること。第四に集石の中にはカルシウムが付着したと思われる黒斑がみられること。第五に背景には山系がせまり燃料となる薪の供給が容易である。このことからみて、火を利用し海に関するものを対象とした何らか生産遺構が想定される。

この条件をみたす遺構としては、まず製塩場が考えられる。製塩場の仮定に対して消極的な資料としては、第一に師楽式といわれる製塩土器がほとんどみられないこと。第二に集石間を清掃し捨てたと思われる灰原が周囲に見られないことから、灰原がすでに削平されたかあるいは当初から存在しなかったものと考えられること。第三に集石の間の土壌が他の製塩遺構のように固くしまっていない。第四に当時とほぼ同海水位にあると思われる現海岸線から相当離れていることなどがあげられる。製塩場以外に火を用いて海を対象とした産物としては、本県関係の平城京出土の木簡の資料などからも考えてみるならば、魚類・貝類・海藻などの加工、あるいは海に関する生産用具などが考えられるが、以上のいずれの仮定を納得させるだけの確証とはならない。

それよりも集石間に土器片が少ないことや、灰原がみられないことは、海水から火力でもって直接的に塩を取り出した一次製塩ではなく、二次製塩と考える方が無難であると思われる。すなわち、木製の木桶あるいは水槽状のもの、時代が下れば鉄製品のものを使い、天日でもって水分を蒸発させて鹹水を作り出す。その鹹水を煮詰め塩を作り出す時か、あるいは製品を運搬する前に湿気を抜く為に火を使用し製塩を行ったと考えることが妥当でないかと思われる。二次製塩であれば土器の使用はある程度限定され、土器がまじりや灰原は一次製塩に比べて非常に少なく、大量の海水を運ぶ必要もなく作業が容易である。すなわち、天日でもって鹹水を作り、燃料の供給容易な場所でもって二次製塩を行い塩を作り出したと考えられる。燃料の確保は、大型蛤刃磨製石斧の使用が古墳時代まで使用され残っている例、鉄器はほとんどが古墳の副葬品として埋葬されている以外に鉄斧が集落内からの出土例が少ないことなどからみると、鉄製品が生産段階で多量に普及していたとは考えがたいことからみて、当時は、海水の入手よりも燃料の確保の方が作業としては苦勞していたと思われる。以上のことを総合して考えてみると、本遺跡の集石遺構の性格を考える上で製塩に伴う集石遺構が妥当な考え方でないかと思われる。

集石遺構の時期については遺物の項で述べたので詳細は省略するが、上限は古墳時代、下限は平安時代と思われる。遺物の主体は奈良時代以降のものが多く、この時期に生産がさかんに行われていたと思われる。

集石遺構内の遺物の时期的な差や集石が複合していることを考えてみるならば、製塩が専業として行われていると考えるには規模が小さく、むしろ季節をえらんである一定の時期に行われたと考えられる。しかも同一場所において何回もの集石の重なりがあることからみて、土地適定において土地利用に限定された場所があり、テリトリーの範囲の設定がある程度行われているようである。

しかしながらこの思考はあくまで仮定であり今後の検討を要する。

なお昭和56年9月上旬から昭和57年3月中旬にかけて調査を行った大毛島22区遺跡（仮称ウチノ海遺跡）においても製塩址と思われる集石遺構がみられた。この遺跡は標高1m前後の高さにあり幅5mの道路をはさんですぐ海である。集石遺構の海側で少量の土器片を含んだ灰原がみられるが、他県の製塩址にみられる多量の土器片はみられない。立地条件としては、山系間のごくわずかな平地にあり、しかも東側と南側は急傾斜の山に囲まれ日照時間が短いことから、瀬戸内海気候の降水量の少ない自然条件を利用して一次製塩を行い、その後火力でもって二次製塩を行った可能性があるようである。なお大毛島6区（仮称亀浦遺跡）においても、北斜に立地したわずかな傾斜地に集石遺構が検出されている。ここでも土器片が非常に少ないことから同様な性格の遺構と考えられるのである。一応今回の段階では、これら3ヶ所の集石遺構は二次製塩に伴う集石遺構であると想定してみた。なお本遺跡の集石の状況は、大阪府岬町小島東遺跡の製塩石敷炉遺構と非常に類似したものであると考えられる。今後本県における調査資料の増加によってこの集石遺構の性格がより解明されるものと思われる。

なお今回の報告は概報であるが詳細については本報告の段階で変更があることを明記しておく。

文 献

- ・鳴門市史編纂室編「鳴門市史」 1976
- ・徳島県高校地歴学会編「徳島県郷土史辞典」 1974
- ・文化庁編「徳島県遺跡地名表」
- ・日本考古学協会編「日本考古学辞典」
- ・水野清一、小林行雄編「図解考古学辞典」
- ・森浩一、白石太一郎編「紀談、鳴門海峡における考古学調査報告」同志社大学文化学科 1968
- ・近藤義郎「土器製塩の話」考古学研究 1979～1980
- ・近藤義郎「製塩」日本の考古学Ⅳ 1967
- ・森浩一「製塩土器」体系日本史叢書 10、産業史1 1981
- ・中村浩「陶器田」大阪文化財調査報告書
- ・松永佳美「昭和56年度大毛島地区現地説明会資料」1982
- ・菅原康夫他「中内遺跡」 1981
- ・倉敷考古館研究集報第14号「広江、浜遺跡」 1979
- ・世界陶磁全集3 日本中世
- ・岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 28」 1978.9
- ・香川県教育委員会、本州四国連絡橋公団 IV、大浦浜遺跡の調査、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅳ」 1981.3
- ・詫間町文化財保護委員会「石製武器の発達」紫雲出 1964.9
- ・香川県教育委員会 高屋遺跡「香川県埋蔵文化財調査年報」 1980.3
- ・九州歴史資料館研究論集7、亀井明徳「中国古窯跡地名表(1)」1981.8.31

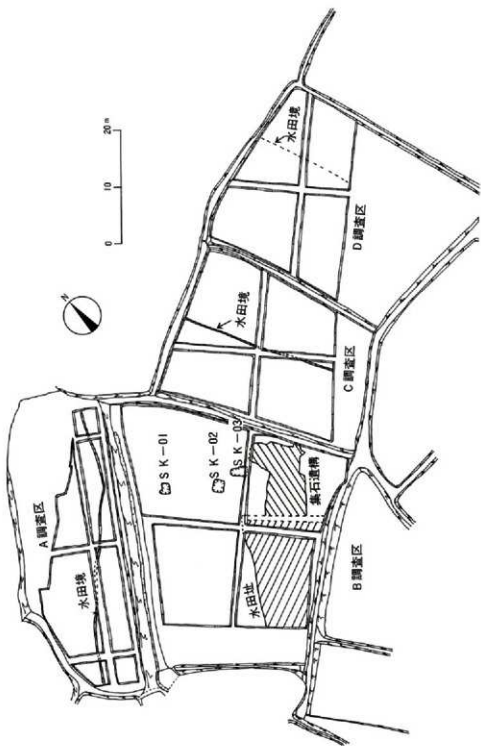


第1図 大毛島39区遺跡周辺の主要遺跡

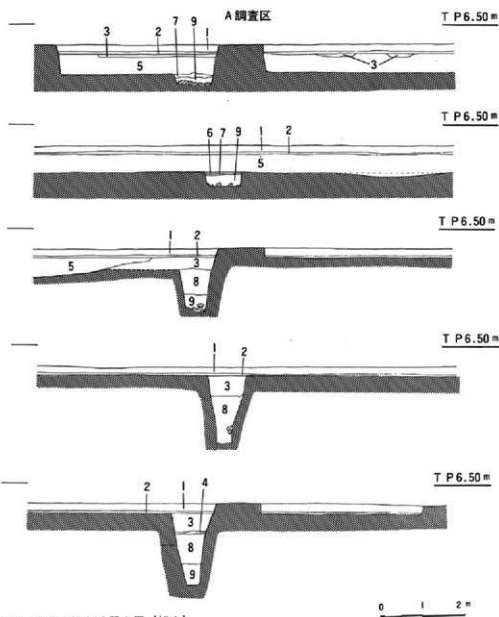
- 1 鳴門公園千疊敷下遺跡 2 北山古墳群
- 3 納言山古墳群 4 大毛島39区遺跡
- 5 土佐泊庵寺(仮称) 6 松瀬山古墳群
- 7 室古墳群 8 田ノ浦古墳群 9 島向古墳
- 10 阿波弁神社古墳群 11 日出古墳群
- 12 日出遺跡(製塩遺跡)

1 : 25,000

鳴門海峡，撫養
国土地理院発行

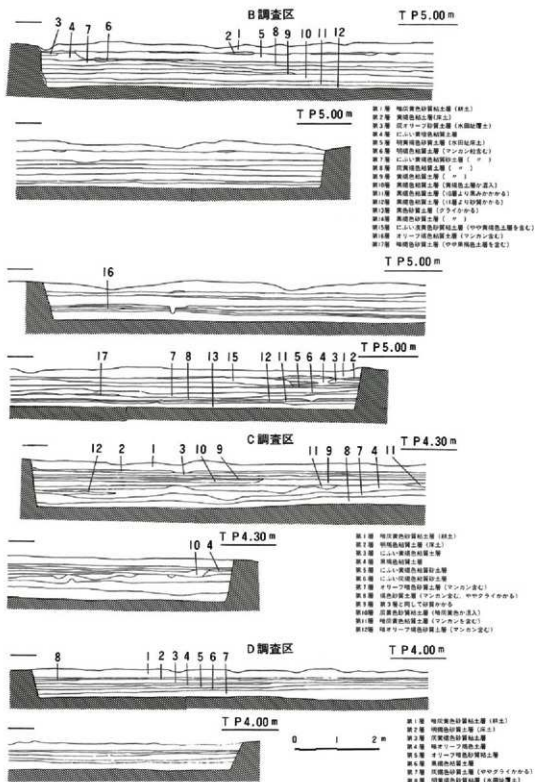


第2図 大毛島39区遺跡，全測及び遺構配置図

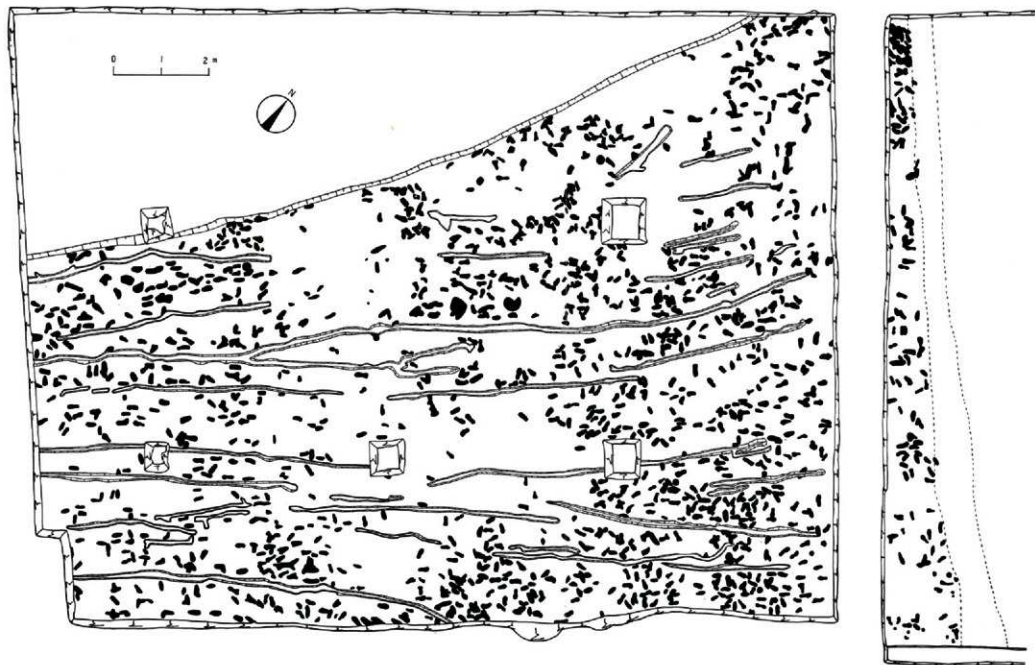


- 第1層 暗黄灰褐色砂質土層 (耕土)
- 第2層 黄褐色粘質土層 (床土)
- 第3層 にぶい黄褐色粘質土層 (旧耕作土)
- 第4層 黄褐色粘質土層 (旧耕作土床土)
- 第5層 明黄褐色粘質土層 (瓦礫を含む)
- 第6層 にぶい黄褐色粘質土層
- 第7層 褐色粘質土層
- 第8層 褐色粘質混土礫層
- 第9層 暗褐色粘質土層 (グライがかかる)

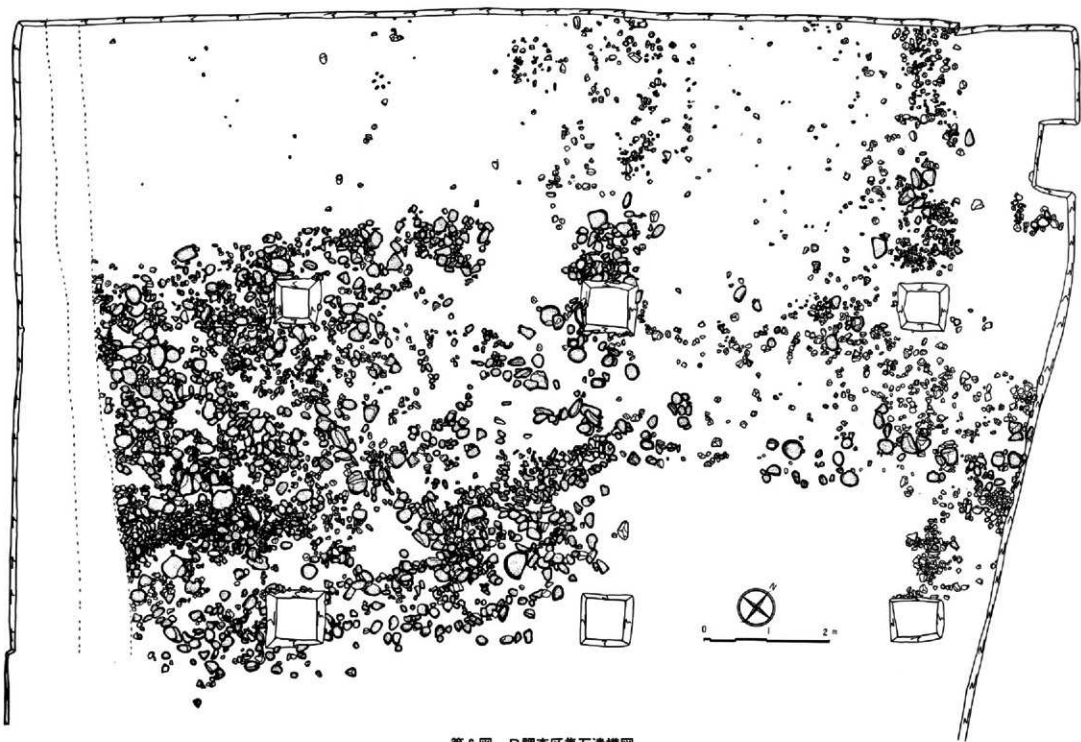
第3図 A調査区 土層図



第4図 B, C, D調査区 土層図



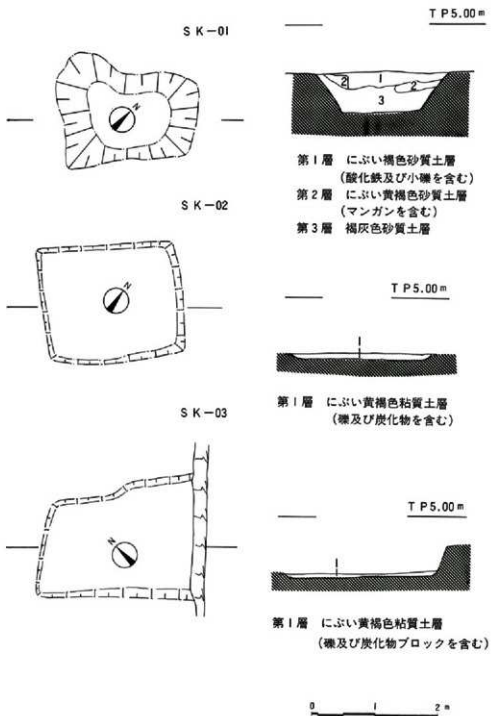
第5図 B調査区水田址遺構図



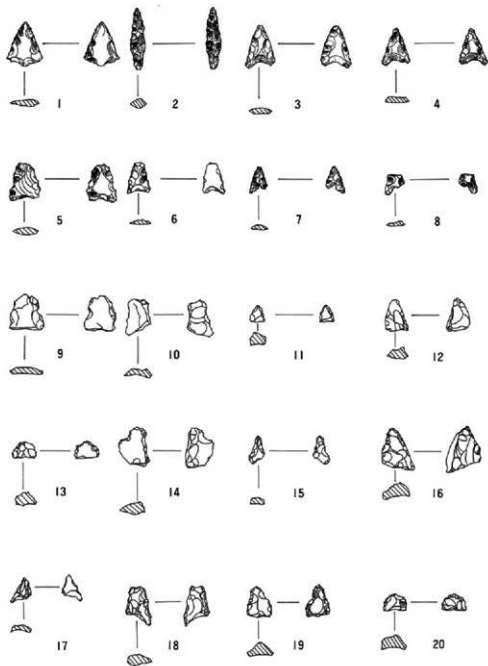
第6図 B調査区集石遺構図



第7図 B調査区集石遺構内土器出土状況図

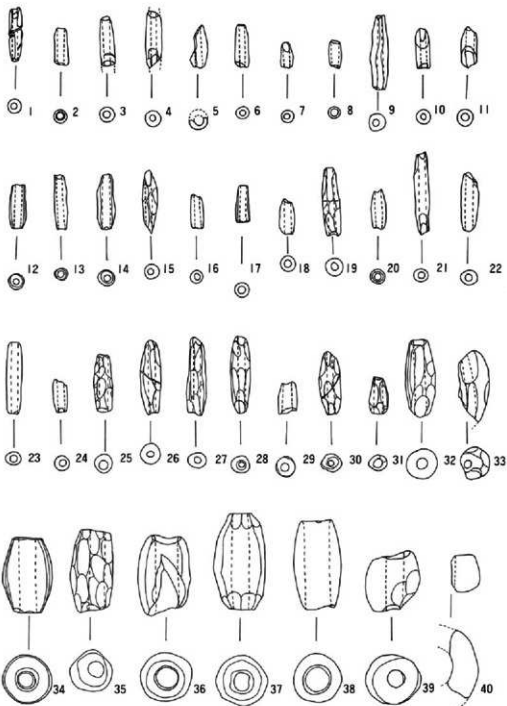


第8図 B調査区土壌状遺構図



1-8 石鏃 9-11 サヌカイト 12-20 チャート (1, 5, 6, 7 B区出土
2 C区出土 3, 8 A区出土 4 表採)

第9図 石鏃 サヌカイト チャート 剥片図 縮尺2.5分の1

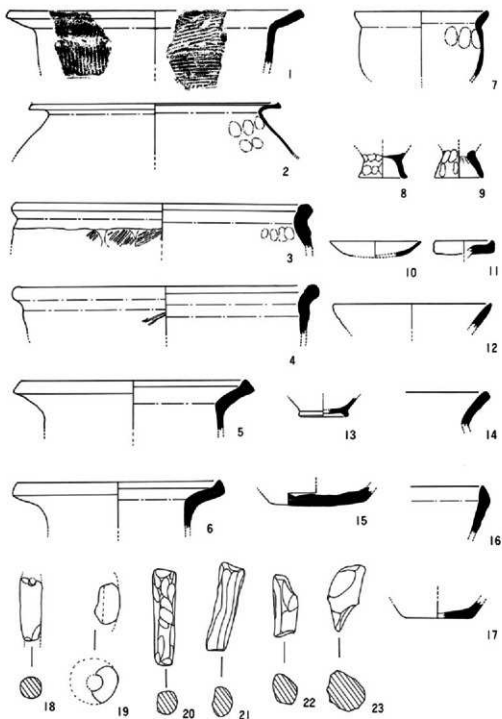


1-6, 8-12, 16, 19, 20, 22, 24, 25, 28-34, 36 B 調査区
(37, 38は陶質, 他は土師質)

7, 14, 15, 17, 21, 23, 37-39 A 調査区 18, 40 C 調査区

13, 16, 27 D 調査区 26, 35 表採

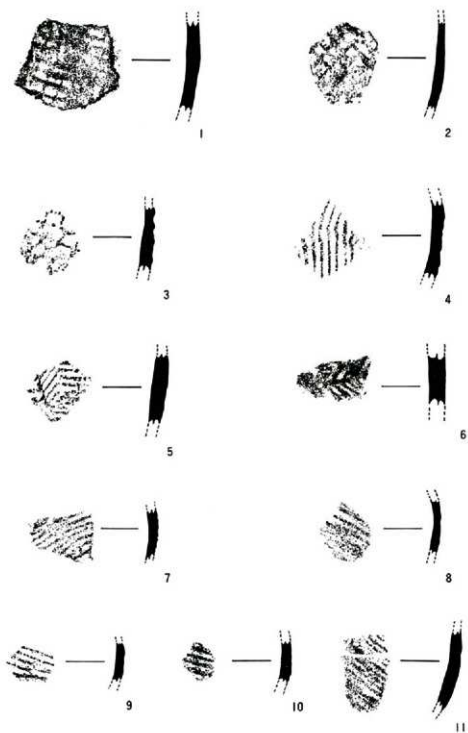
第10図 土鏝実測図 縮尺2.5分の1



19A 調査区 2～9, 12～18, 20～23 B 調査区 10, 11

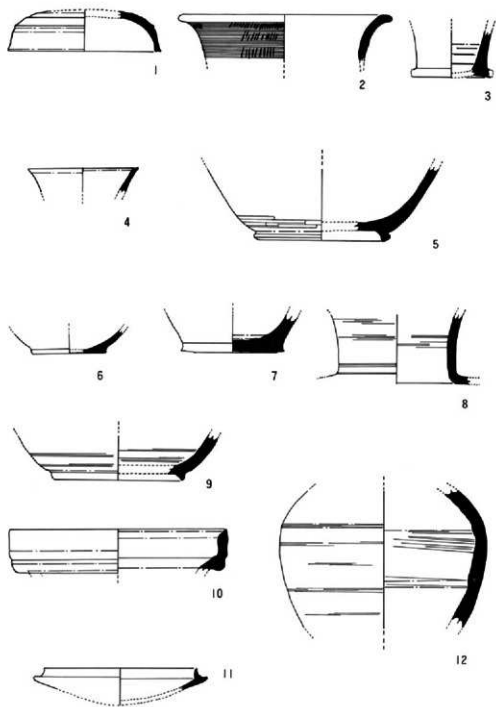
C 調査区 1, 表採 8, 14, 15, 16, 18, 21 集石遺構内

第11図 土師器・土鐘・支脚実測図 縮尺3分の1



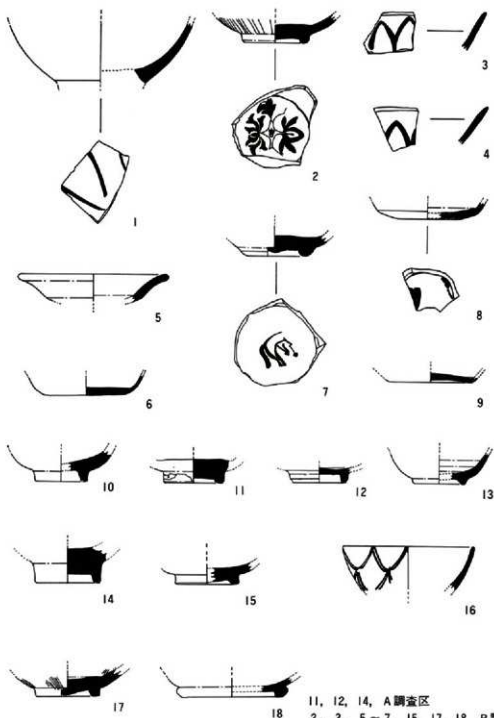
1, 3, 11 A調査区 2, 5-10 B調査区 4 D調査区

第12図 土師器拓本図 縮尺2分の1



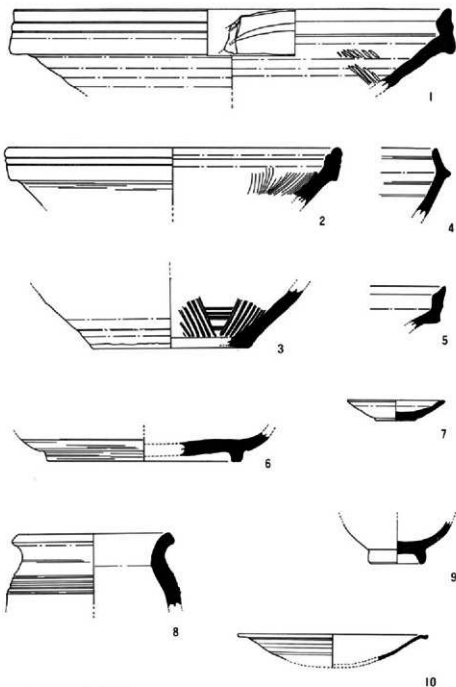
4, 7, 8, 12 A調査区 3 C調査区
 1, 2, 5, 9, 10, 11 B調査区 6 表採 (1, 2, 5, 9は集石遺構内)

第13図 須恵器実測図 縮尺3分の1



- 11, 12, 14, A調査区
 2, 3, 5-7, 15, 17, 18 B調査区
 1, 4, 8, 9, 13, 16 C調査区
 10 表採
 (1-15, 17, 18青磁, 16は近世磁器)

第14図 磁器実測図 縮尺3分の1



9, 10 A調査区
 1, 2, 6, 7 B調査区
 3, 4, 5, 8 C調査区

第15図 陶器実測図 縮尺3分の1



調査区全景



D調査区全景



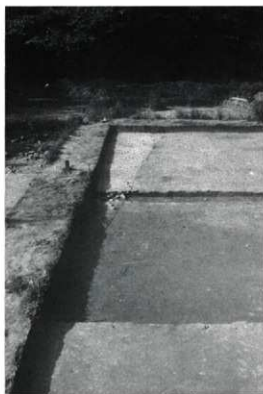
調査風景



同上



同上



A 調査区確認状況



同 上



A 調査区水田址検出状況



同 上

B調査区
水田址確認状況



同 上



同 上



B 調査区
水田址検出状況



同 上



同 上



B 調査区
水田址検出状況



同 上



同 上



B調査区
水田址検出状況



B調査区水田址足跡



同 上





集石遺構検出状況（南より）



集石遺構検出状況（南より）

集石遺構検出状況
部分写真



同 上



同 上



集石遺構検出状況
部分写真



同 上



同 上



集石遺構内遺物
出土状況



同 上



同 上





集石遺構検出状況（東より）



S K-02, S K-03検出状況（西より）

集石遺構底部
検出状況部分写真



同 上



同 上



集石遺構底部
部分写真



同 上



同 上

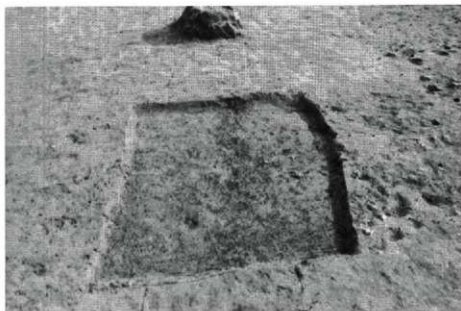




S K-01検出状況（西より）



S K-02検出状況（南より）



B調査区 SK-02 (西より)



B調査区 SK-03 (西より)



A 調査区出土状況



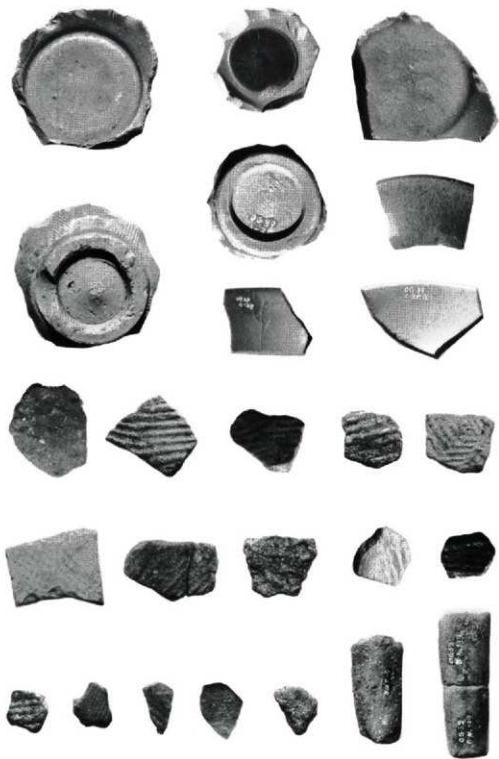
B 調査区土層



C 調査区土層



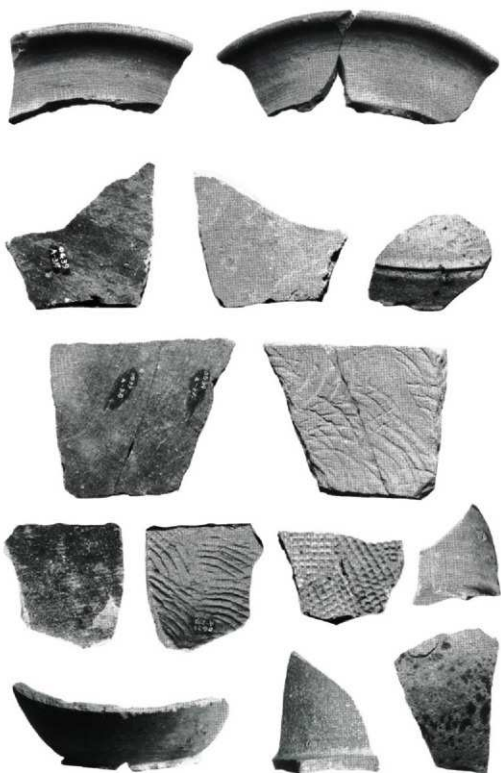
第19図版 石器及び土錘



第20図版 青磁及び土師器，支脚



第21図版 土師器及び陶器



第22図版 須恵器

徳島県文化財調査概報

昭和55年度

(1980)

発行 年月日	昭和57年3月31日
編集	徳島県教育委員会文化課
発行	徳島県教育委員会
印刷	徳島県教育印刷株式会社